

おもむか  
(昭和六〇年度放送文学賞受賞作)  
沢瀉の紋章の影に

(第五回) 終

吉田紗美子

五 黙して語らず

一

堺町御門の変により京から逐い落とされた長州は、この一年間というもの「薩賊会奸」と薩摩と会津の陰謀を憎み、朝廷に哀訴をかさねたが、ききいれられなかった。

そして今年元治七月、ついに雪冤の軍を上洛させたが、蛤御門に敗れた。今は「朝敵」。

幕府はただちに關西三十六藩の兵を動かして長州征伐するという。

そればかりではなかった。前年の攘夷に報復するため、英米蘭仏の四国聯合艦隊が十七隻、馬関沖に集結し、あす八月五日午後三時を期して砲撃の火蓋を切る。

長州は腹背に敵をうけて危機に瀕している現状だった。

その、八月四日。

非常事態になって、蔵本の門には槍をもった番士が二人立つようになっていた。

江村彦之進は門に入るまえ、なかば習慣的に堅登の広場に聳える樹々に目をやった。天が高くなる季節、森は表情ゆたかになり、近よればどの大樹も川のせせらぎに似た無数の葉擦れの音をひびかす。それは、物言わぬ樹のきよらかな声ともきこえ、近頃の上御用所の愚劣な議論の声ばかりきかねばならぬ彦之進の慰藉ともなっている。

彼は足をとめた。今朝は大楠の根元に二羽の鳥が佇んでいる。睡眠不足の瞳をこらして鳥にしては大きすぎるそれをもう一度たしかめてみると、それは二人の黒衣の僧で、館をみあげて凝然と動かない。黒衣の者たちは眩しく晴れた爽涼の朝の風景になすりつけた二つの汚点しみのようにもみえた。

徳山中を震撼させた騒動は、この朝、前ぶれもなく城下に入ってきたこの二人の僧侶から始まったのであった。

蔵本ではいつも通り、征長軍を迎えて、主戦か恭順かの、はてしない評定である。この問題はまた支藩として、あくまで宗藩と歩みをとにするか、宗藩とは独自の道をえらぶかに絡む選択であるから、早急に結論の出るはずはなかった。それよりも、上洛進発軍の責任者である福原越後、国司信濃、益田右衛門介ら、三太夫の処遇の方が先決問題であった。

三人ははじめ、それぞれの領地に分檻、ときまっていたが、四国聯合艦隊の来襲によって、馬関からもっとも遠い徳山にといそぎ変更となり、まもなく檻送されてくる。越後は主君・元蕃の実兄にあたる人。すべてに手落ちのないように、その場所は、その待遇は、と協議しながらも、家老たちの口吻にはもう幕府へのおもねりから、幽閉を苛酷にしたい気配が窺える。つい先月まで宗藩の尻馬にのって上洛だ、進発だと騒いでいた者が、と彦之進は呆れてその顔を見た。

彼は三太夫を藩校の寮に収容する考えだった。教授たちや浅見栄三郎にも謀り、なお寮長である次郎彦の意見もききたいと

使いを出したが、次郎彦はまだ「病中」として応じない。不快をおさえて出向いてみると、ひさの姿もみえず、当の次郎彦は仇敵をみるような眼で彦之進を迎えて、いきなり、「いかに江村どのが上洛進発に反対とはいえ、七月も九日になって同志を募るとは」と、なじってきた。

次郎彦たちが大坂へ着いたその日、午前中に蛤御門での戦いは終わっていた、もう一日早ければ戦に参加できたものを、と、それを言い立ててやまないのである。

「まだ言うか。かりに徳山兵わずか十二名加わったとしても大勢が覆せたか」

彦之進が眞向からどなりつけると、次郎彦は「死に後れたのだ、この無念さはわかるまい」と拳で分厚い胸を叩き、獣のような声で号泣した。久坂玄瑞の戦死に感乱して、とても相談どころのはなしではなかった。

その、彦之進がほんの少し中座したあいだに、蔵本中はひっくり返るような騒ぎになっていた。陽が廻るまで玄関わきの小室でほったらかされていた二僧が不快を露わにして、「淡路守様に拜謁したい」と、はじめて宇和島侯の親書をさしだしたのである。二僧は、一人は藩士の弟で宇和島・等覚寺の僧、清崖なるもの。他は殿に面識のある、宇和島・大隆寺の晦庵。ともに宇和島侯が姻戚のよしみでさしつかわしてきた幕府方の正式な使者、とわかったとき、桜井家老は震えた。

すぐに藩主代々の墓地である大成寺を宿舎とし、幕を張れ、番士を立てよ、高提灯も料理もと、扱いを鄭重にする一方で、山口へ、ともかくお使者のことを山口へ、と家老の声は上ずった。

去年、文久三年から、宗藩政府は辺鄙な萩を出て、藩土の中心に位置する山口に山城を構え、そこで政務をとっている。その山口政事堂に一気に馬をとばしてきた彦之進は、「しばらく、これにて」と一室に放りこまれ、やがて忘れられてしまった。誰かが障子をひきあげ、彦之進をみると、「……違う、」ぴしゃりと閉めて、ただだっと廊下をふみならして駆け去った。誰も彼も走っていた。いや、間もなく迫る長州征伐軍に長州全土が浮き足だっていた。

政事堂は溢れかえった人々の怒号と熱気で建物もふくらむばかり、腹背に敵をうけ累卵の危機にあるというのに、その前後夜になっても、主戦すべし、いや恭順あるのみ、と方針定まらず、いたずらに政府の失態を責める俗論派の声のみが高い。去年

以来、長州はまさに俗論の天下、義も思想もすべてを擲って社禩の安泰をはかる、それを「俗論」というのであった。深夜、やっと障子が開いた。されば、御用の趣を、という。彦之進は一息に述べた。

「今朝、徳山に幕府の使者が入り、降伏勧告を携え、会見を要求すると。よって、急ぎ宗藩に報告かたがたお指図を仰ぐものであります」

取次はぎょっと彦之進を見、跳ねるように室外へころがり出た。ほどなく、彦之進の周囲は人で埋まった。

「その使者とは」

「二人とも僧侶であります」

「む、坊主か」

彦之進は二僧のあらましを説明した。

「して、降伏の條件は」

「委細は会見のうえで、とのみ。よって、なにとぞ至急、会見の儀を」

「……後手ごてになったのう」

だれかが嘆息した。

宗藩は、芸州侯を通じて幕府へ謝罪するため、その斡旋を岩国の吉川きしかわ侯に依頼したのだが、その返書もとどかぬ先に幕府の使者がのりこんできたのである。

宗藩側は協議のためひきとり、彦之進はまた取り残された。まもなく白んできて、五日の朝になろうとする。

そして五日はすぎ、夕刻になった。

突然、太鼓を叩くに似た音がおこった。

馬関での敗戦を告げる早馬が、何騎かもつれこんで大手門への橋をわたってきた。

馬関では惨敗したばかりか、イギリス陸戦隊に占領された一角にはイギリス国旗がへんぼんと翻っている、という。

この瞬間から、それまで渋滞していた宗藩の評定は、「恭順」にむけてどっと動きだした。さしあたり馬関での敗戦処理に全力をあげ、幕府へはなんとしてでも時を稼ごうというのである。

そこへ、吉川侯から承諾の返書が届いた。

また別に、周布政之助、今は改名して麻田公輔が政事堂に入ってきた。この非常事態に重役も御一門も物の役には立たぬ、この上は吉川侯に調停を依頼するほかない、もとよりこの責めは疎になっても負うつもり、と、単身、岩国めざすというのであった。

岩国―吉川家。

この時期、突然に岩国が浮上してきたのには理由があった。

宗藩はここを「家来」とみなすが、吉川家は、長府や清末、徳山の三支藩とはきわめて違う立場にある。遠祖は毛利元就の二子―吉川元春であるから、系統からいえば「家来」でもおかしくはない。しかし吉川家がかつて家来として認めたことはなく、幕府も、六万石のこの藩をつねに「諸侯の一つ」として優遇してきた―宗支離間の政策上からである。宗家と吉川家は、懇懃で鎧われた冷やかな関係を保ってきた、宗家に吉川広家は関ヶ原の役で西軍に味方しなかったとの感情があり、吉川家は吉川家で、毛利氏の封土が半減しても存続したのは広家が東軍に味方したからではないかとの反論があったせいである。その関ヶ原役以来の幕府寄りの吉川家は、いまの長州藩にとって何にもまさる益、抛りどころなのである。

ただちに宗藩主の名をもって吉川侯あて、正式に調停依頼の文書が作成された。麻田公輔に家老名義の者をつけ、使者として岩国へ出立させた。

徳山で待つ使者のために、恭順申告案のあらましをまとめたのは、すべてが了った後、六日に代ろうとする深夜である。

会見の使者は木梨平之進、人あたりのよい平之進と彦之進の二人は、灯影一つない山道を徳山へとゆっくり馬をすすめていった。

「かりに、幕府方の条件がどれほど厳しくとも、宗藩は恭順の方針でありますか」

彦之進が問うと、平之進は、

「幕府の條件が皆目わからぬ現在では、ひたすら、そうせよ、と。暗中模索とはこのことであります」と、あたりの濃い闇に目をやり、にこにこ話題を転じた。

「二僧が山口ではなく、いきなり徳山へ入ってきた意中を、どう読まれます」

「約やくまるどころ、宗文の離間が目的かと」

「さよう。で、徳山は」

「……萩の影。宗藩とおなじくどこも社稷をのみ守りたい者はいます。だが、いま長州を割ればすなわち自滅。この首かけでも、それはさせませぬ」

「力強いお言葉。明日はそれで、ぐんとやりやすくなりました」

平之進は大きくうなずいた。

徳山到着。夜中の登邸をし元蕃に拝謁、衣服を改めた二人は六日早朝、大成寺に向かう。

山口で用意した恭順案は、

過激の罪をもって三太夫を閉門蟄居とし、

節制至らざるをもって藩主は隠退し、

加えて申出とあらば公自ら上落し、尾張征討総督に謝罪の意を表するにやぶさかでない。

だが、幕府方の條件ははるかに苛酷なものであった。

三太夫の首を尾張征討総督にさしだし、

藩主父子、寺院に蟄居のうえ相統は興丸殿なさるべく、

城取り毀し、封三十六万石中十万石を削って天領とすべく、

そのうえの謝罪なれば、国司信濃の具足櫃のなかより発見された黒印の軍令状の件、および蛤御門発砲の件は相済むであらう。

「われらが調停し、ようやくこれまでに条件を緩和させたのじゃ。お受けなきときは幕府はただちに海陸より征長の軍を起す。この條、逐一、お受けあるか、いかに」

平之進は耳を疑がい、しきりに額の汗を懐紙でおさえながら、

「これは……あまりに。これでは我が藩に死ねと仰せられるようなもの。挙げて恭順の意を表しておりますれば、この条件いまま少しゆるやかに、ご勘考願わしく」

「逐一、受けるか否か、要求するのはそのみ。いかに」

たたまかける清崖の全身から攻撃的な気配が発散した。彦之進は「僭越ながら」と、清崖をじろりとみた。

「ご僧は、幕府と当藩との調停にまいられたとのみ存じましたに、先程からただただ、幕府の命のみ口演なされます。これでは談合になりませぬ」

「談合だと。朝敵の身でなにをいうか」

清崖は、降伏使者を引見する勝者のごとくその言葉は無礼をきわめた。平之進はひたすら恐縮しつつ、上落軍の性格や軍令状について言葉をつくして釈明したが、ただ簡潔に罵られ、これはいかなれば挑発の意図でありましようや、と彦之進に目で問うた。追隨ばかりでもなりますまい、と彦之進は首をふった。長州はまだ決戦して敗れたわけでなく、まして彼自身は主戦すべしと決めている。

「われら申告案通り、いささかも恭順に相違ありませぬが、さりとて理非曲直を欠いた恭順も望みませぬ。申告書以上の條件には応じかねます」

清崖の黒い眉がぐっと縮んだ。

「短慮者が。毛利氏の命、旦夕に迫ったいま、腹背に敵を受ければどうなるか、兄ら自身、誰よりも承知であろうが」

長州側の二人は顔色をかえた。

毛利氏の命云々は許すべからざる侮辱であった。席を蹴って立つばかりの險悪な空気になったとき、それまで沈黙していた

晦敵が、「ところで」と茶飲み話のようなさりげなまで彦之進をみた。

「もしも宗家が幕府にお服しなきときは、徳山はどうなされる。これと断って服従されるとあらば、愚僧、いかようにもして藩の安泰はお計りいたすが」

彦之進はしばらく暗い凝視を晦敵に注ぎ、宗藩使者を目の前にしてぬけぬけと裏切りの打診をするか、とうつすら笑った彼は「口を利くのも汚らわしいが」と呟き、次の瞬間、激して大声でいった。

「当藩の去就はいかなる場合も宗藩のお指図に従うところ、徳山のみ安泰を計ろうなど藩士誰一人望みはせぬ。その儀、代表として断固お断り申す。古書にもいう、君辱められて臣死す、と。かくのごとき謝罪勧告、いや威嚇甘言をうけんよりは、ただ斃れてのち己むのみ。早々引きとられい」

晦敵は、それでよいかたと嘲笑った。

両三日滞在する、低音で告げた二僧は風のように方丈を去った。

登郎して報告すると、元蕃の顔は家老の誰よりも沈痛になった。

「交渉は決裂したわけではありませぬ。征長軍は早急には動きましますまい、天下の諸侯、長州に同情する向きも多うございませぬば」

平之進はそう言上し、館を退った。

宗藩はあれほど苛酷な条件を受けいれるはずがない、平之進は楽観しているが……と、征長軍の足音を間近に聞く思いで口数少なくなつた彦之進とは逆に、堅登の広場に出た平之進は、いとも無造作に袴をはずすと、馬の鞍に挟んだ。その手付きに、彦之進がある違和感を抱いた瞬間、さっきまでの恐縮しきった、平伏して脂汗ばかり拭いていた彼とは別人のようににこやかになつた平之進は、

「脇方わきかたとしては、あれで十分でありましょう。では、御免」

ひらりと馬に跨がり、一気に鞭をあてた。



彦之進の頭に白熱した閃光が走った。

脇方……、では宗藩は、吉川家の幹旋を本とし、宇和島侯のほうは最初から脇方としか見ていなかったのか。そこまで吉川侯との交渉は進んでいたのか。つまりこの会見は、徳山と宇和島侯の顔を立てるだけの猿芝居にすぎなかったのか。それゆえ平之進はあれほど罵られても寛容でありえたのか。

元蕃の沈痛な表情がうかび、なにも知らされず鹽棧敷でひたすら待たされた自分の姿が甦えり、肚の汚い宗藩が……と、彼の頭髮はことごとく逆立った。長州を割らぬためにはこの首かけても……みずから口にした言葉がたとえようもなく白々しく、眩しい初秋の陽射のなかに浮いていた。

平之進は馬上軽やかに駆け去ったが、使僧の存在は徳山の家中に打ちこまれた楔となった。

早くも蔵本の門からばらばらと人影がこぼれて、熊谷志津美らがまっしぐらに彦之進めがけて走ってきた。「おぬし、独断で宇和島侯の幹旋を拒絶したのか。慮外者が」、口ぐちに血相変えて叫んでいた。

## 二

蔵本につめていた家中の者は、幕府方の条件のきびしさにどよめいたが、さらに会見の決裂をきくと総立ちになった。

すべての眼と指が彦之進を非難していた。だが彦之進はまるで無関心に傲然と腕組みして天井をみあげていた。

いまは彼のあたまはすべてが見通しになっている。おそらく宗藩は二度と修正案をもった使者をよこさないであろう。最初から、徳山へ来た二僧の狙いは徳山切り放し、とみて宗藩は二僧を問題にしていなかったのである。しかし、この怖るべき宗藩の底意を一言でも洩らしたら、「徳山のみ和を乞え」との俗論派の声はますます大になるであろう。

征長軍を迎えて徳山が戦の最前線となっても宗藩は徳山を見殺しにして顧みないであろう。それが判っていてなお、今、徳

山のみ和を乞うことはすなはち長州を自滅に導く行為であり、断じてそれはできぬ。「君、君たらずとも、臣、臣たれ」という。「臣義」とはなんと重い言葉か。徳山三萬石の去就をおもい、主君の沈痛な表情をおもって彼の胸は痛んだが、彼は強引に沈黙を守りつづけた。

とみて、俗論派の声は恣になった。

「朝敵となった身が恭順を示すに、三太夫を斬るも萩の大殿に押隠居願うも是非ない。必要とあらば、世子を切腹させ、將軍の庶子に毛利氏を相続させるもいたしかたなし。ただちに江村代表を罷免し、かわりの使者をもって改めて二僧と和を講ぜよ」「そんなに命が惜しいか」

反論するのは、単身、久坂玄瑞とともに蛤御門に戦った井上唯一、また馬関での戦をおえて帰国したばかりの同志たちであったが、彼らとて江村彦之進の不可解な沈黙に当惑するばかりであった。

七日、八日、議論につぐ議論を重ねて結論は出ず、感情ばかりが募って徳山の家中は騒然とした気配になってきた。しかも使僧は両三日しか滞在しない。

八日後、ついに俗論派は強硬策にでた。

誰からともなく富山家老邸にあつまり、休職中の富山家老は彼らに押されて夜中に登邸し、殿に迫って徳山のみ和に応ずる旨の文書を得ると、それを大成寺にいる一僧のもとへ届けたのである。噂はひそひそと流れて九日朝には誰知らぬものはない。さすが中立派の者も憤然として、「正直ゆうて、江村代表の拒絶は独断であった、だが、富山どののやり方は愧ずべきじゃ。もし、これで徳山のみ恭順と決まれば、私は殿の目の前で、この腹かっさばいて死んでやる」と、口々に言いあった。

九日朝、横本丁の児玉邸に河田佳蔵、井上唯一らが集まった。

三人は多くを語らなかつた。佳蔵が報ら顔をあげて「江村どのはこの期において痴呆のごとく沈黙し、本城どのの持論、『樽俎接衝』はかくのごとき結果しかもたらさぬ。もはや言葉はなんの役にも立たぬ」といったきりであった。

三人は顔を見合せ、「では、今夜」、とうなずきあった。

夕刻、どの邸にも一本は植えてある梧桐の広い葉が宵の空に影絵となつて浮かびあがるころ、次郎彦はたちあがった。佳蔵は間もなく富山邸に入るであらう。

井戸傍にいつて身を清めた。松蔵がそばで衣服をさしだした。下帯を新しくしてあつた。彼はするどく松蔵を一瞥し、だまつて身につけた。仏間へいつて半九郎の位牌に合掌してから、次郎彦は敷際にちかい富山邸との境の土塀のもとに身をひそめた。今日は八月九日、毎年といつていいほどの初秋の季節には汗みずくになつて右往左往していた、と彼は記憶を手繰つてみた。去年は平野屋の篤兵衛相手に、翻弄されながら借銀に心をくだいていた……あのとき、片腕になつてくれた谷城老人は、今は藩邸が幕府に没収され、他の下役ともども檻禁されて、家畜にも劣る扱いに難儀していることだらう、不潔と湿氣と暑さ、それに飢え、とても長くは生きられまい。その前の夏は……はじめての上洛、三條大橋をわたつた日の感激。尊攘運動は盛りあがり、赫々と燃える都の夏、自分も佳蔵も唯一もみながいっばしの志士気取りだった。そして今は重い石で蓋をしてしまつた恋もあつた。だが、文久という輝かしい年はあまりにも早くすぎ、今年、元治はなんという年だらう、状勢は日に刻に不利、藩論は止まるところを知らず後退して、いまは俗論一色。

佳蔵は草々と富山邸に案内を乞うて入つてゆくはず、二僧への文書をとりさげよう要求し、きかねば、その場で刺す。自分がそれを桜馬場で待つてゐる唯一に連絡すると、唯一はすぐさま本多眞用人を襲う。富山と本多用人、この俗論の双頭を殲し、一気に藩論を転回させる。徳山が決起したと知れば、宗藩の同志がかならず動き、長州全土がいまの無氣力から奮いたつはず、成るか成らぬかは問うところではない、ただ魁となればよい。

台所の戸があいて光が洩れた。もともと松蔵がこちらに背を向け、屋根をみあげて話している。もとは、もう何年も葺きかえない腐つた台所の屋根を苦にして、今日の昼も苛立つたようにいつた。「この前から幾度も申した屋根のことでありすが、萱場の干葺は順番がありますで、するならすると早目に申さぬと、急にゆうても使えませぬのじゃ」、屋根の葺きかえ、次郎彦はもとの頭を領している些事の大ききにおどろき、ぼんやりもとの顔をみた。彼の承諾ににわかに機嫌よくなつたもとは待ち遠しげに、「もうひと月もすれば氣持よう過ごせますな」といつたものだが、ひと月先、来るか来ないか、彼には涯なく遠

い先の時である、次郎彦の立っている足元はいちめん著<sup>し</sup>我<sup>が</sup>の繁みで、ぬるりと冷たい湿った葉が素足にふれていた。手をやる  
と、たつぷりと血を吸った秋の縞蚊が、ぼとぼと落ちてゆく。

張りつめた気分<sup>に</sup>に刻まれているこのひと月の記憶は、日や時の単位で計れないほど、重い。宗藩の上洛軍が進発していった  
あとの七月九日になって彦之進はやつと有志を募り、ただし全員浪人の資格で、出陣は親兄弟にも内密のこと、と誓わせた。  
いわば、徳山藩は関知せぬ、といったのである。足輕、仲間<sup>ちゅうけん</sup>をふくめた次郎彦たち十二名は極秘裡に大坂めざしたが、戦はず  
でに終わり、安治川口<sup>あぢがわぐち</sup>についてみたものは港にひしめく味方の敗走兵の姿であった。

久坂の戦死をそこで聞いた。京の状勢に明るい久坂は軍議の席で、「いま一度、朝廷へ哀訴をかさね、軍をいったん大坂へ  
下げ、世子の後統軍と合流して挙兵あるべし」と、切々と説いたが、来島又兵衛らに大いに罵られ、ついに押しきられて動い  
た。また兵の氣勢もそれほど揚っていたのである。寺島忠三郎も入江九一も久坂に殉じて死んだ。次郎彦は自分の汚染<sup>しみ</sup>一つな  
い戎衣に目を移して、目も昏むような恥を覚えた。「死に後れた」想いがそれ以来、彼を打ちのめしてしまった。

文太郎が泣きだした。ひさが乳を含ませているだろう。岩崎謙はひきあげてきたその船でひきつづき四国聯合艦隊が集結を  
はじめた馬関へと向かったが、彼はひさの出産を気づかって下船した。井戸傍の大たらいに鯉が二尾泳がせてあるのが珍しい  
眺めだった。ひさは蒼い顔をし、息切れするの一言つつ区切<sup>くわ</sup>って話すようなしゃべり方で、赤ん坊を示した。文太郎は彼の  
片草にのるほど小さく、ところどころ皮膚が黄色かった。

今日、奥座敷にいてみると、髪を解いて横たわるひさは、かよわげで、母親の安らぎにみち、別の女のようにみえた。枕  
許に坐った彼は、不器用な彼らしく、いたわりをつたえるのにもっとも散文的な言葉でたずねた。

「飯は食うたか」

「いま、おばあさまが、粥を煮て、おいでますけえ」

そう言ってひさは所在なげな彼に文太郎をみて「お抱きなさいませ」と、微笑した。彼は手を伸ばし、いきなり赤ん坊をつ  
かんだ。ひさはハラハラして、それでは刀を捧げたように、と抱き方を教えたが、うまくゆかず、彼は当惑して胡座した両膝

の回みに赤ん坊をおろした。赤ん坊は弓なりに体を反らせたり、まだ見えぬ溶けそうな腫でじっと彼をみあげては、乳を吸う形に口をすぼめたりした。赤ん坊は熱く、柔らかく、その重みは命そのもの、小さな命が無心に動くたび、暖かな光の波がさざなみだつて、周囲の空間に拡がつてゆくようであった。

彼は安堵してまどろんでいるひさから目を放し、周囲を見廻した。夫婦が居り、子の誕生があり、初秋の陽が簾ごしに鮮やかな明暗を作る庭のたたずまいがあり、法師蟬のなく物憂い午後の静寂がある。つけ加えるべき何物も必要なかった。これが幸せの姿だった。だが彼はこの平安を捨て、家老刺殺におもむこうとする、彼が生涯かけてきたのは、討幕による万民が鼓舞撃壤する世の到来であり、こんな次元の低い藩政改革のためではなかった、しかも藩政改革の手段として家老刺殺は下策、だがあえてその下策もとらねばならぬほど追いつめられてしまった。時流の力は彼らではどうにもならぬ、それが無念でならなかった。

いつか彼は鼻梁に涙をつたわせていた。

「なにか……」

ひさは、その気配に目をあけた。

「なにも」

「でも今日で十日、帰国なさってから、食も進まず、夜も寐まれず、わたくしの枕許に坐っては、涙をこぼされてばかり……」  
なにを迷っておいでです、とひさは言外に励ました。

「いや、もう、覚悟はきめた。もう、泣きはせん」

ひさの直感のするどさにたじろぎながら、次郎彦は涙のたまった大きな眼をそらせた。

ひさは胎内の収縮に眉をしかめてから、

「おばあさまも、産後の肥立ちはよい、とゆうておいでです。あと十日もすれば、元の体になりましょう」

家のことはご察じなさいませ、行かねばならぬところがあれば、ためらわずお行きなさいませ、そんな眼で彼をみつめた。

その眼は、言葉を超えて彼のすべてを見透し、いたわり包むようなふかい瞳の色であった。

「どこへも行きはせん」

次郎彦は偽りながら、心耳をすませてひさの心の動きを聴いた、今ほどひさの心がきこえることはなかった。彼はひさをみつめ、これが夫婦の愛の形なのかと、いつまでも黙ってひさの傍に坐っていた。

二人の無言の気配をみた祖母は、「あとにしましよかの」、誰にもなく呟いて粥の行平ゆきひらをかかえて引き返していった。

去年の秋、庭隅の一本の柿を指さした祖母は、「あの柿は月夜柿とゆうて満月のころに甘うなります、そのとき挽がんと甘味が抜けてしまいます、夫婦の仲とおなじでありますな」と次郎彦をみあげ、うれしげに次郎彦の手を撫でさすって告げた。

「ひさはおめでたであります」。その無垢なよろこびと感謝にあふれた祖母の透き通るような笑顔や温かい乾いた掌の感触は、彼に、自分の幸せなど置き去りにして、他の多くの幸福のためにと、ひた走りに走ってきた彼の人生を考えさせたものであった。

なぜか、今夜にかぎって文太郎は泣きやまず、夜気を裂いて泣き声は高くなる。昼間、膝をじっと汗ばませた熱い命。彼の息子。その文太郎が成長し、またその息子へと、脈々と連綿とつづいてゆく血のふしぎさ、声をかぎりの泣き声は、彼の遺した確かな命の証しであった。

文太郎とはべつの烈しい口論が聞こえていたのに、それもやんで時がたつ。身をのりだしてみても鬱蒼と深い樹立のせいで富山邸内は窺えない。不審は、やがて、佳蔵仕損じたり、との確信に変わった。では自分一人でやるまでと、塀の瓦に手をかけ、ひらりと向こう側にとびおりた。橙の木が三本。枝の下をくぐって歩きだしたとたん、計算外の出来事がおこった。目の前に、炭小屋に炭をとりきた下男が立っていたのである。下男は立ち竦んだ。次郎彦はその胸倉をつかみ、だまれ、と白刃を振るった。下男は白眼をむいた。そして声をふりしぼって叫んだ、「曲者じゃ。曲者がおりますぞ」。

下男の連呼は、上眼遣いに間合いを計っていた佳蔵の呼吸より、ほんの数瞬、早くおこった。対座していた富山老人と佳蔵とは、はっとお互いをみつめた。

「使僧に密書をとどけたであろう」「知らぬ」では、届けた者の証言も嘘といわれるか、その押し問答の途中、「茶など、まあ飲んで」と肥った色白の品のよい老人が老斑の浮いた手で湯呑みを取りあげ、分厚い唇を湿したばかりのときであった。

老人は手にした湯呑を佳蔵めがけて投げつけ、いきなり縁側の方へと走った。佳蔵も反射的にたちあがった。庭へとびおりた老人は植込みの間を白緋の袖をひるがえして逃げてゆく。佳蔵も追った。老人が内玄関に這いあがるとき、汚れた足袋の裏がまむきにみえた。老人は白髪頭をみせ、薄暗い玄関の片隅でしきりになにかを探している。おれの太刀、と閃いた佳蔵は、走りこみざま体当たりで老人をはねとばした。

刀架の太刀をつかむより早く、もがいている老人の肩先へおもいきり振りおろした。がつ、音をたてて尖先が武者窓の棧に食いこんだ。しまった、ようやく刀を抜きとった佳蔵は、式台から敷石へと逃げる老人めがけて、一跳びして斬りつけた。右肩先へ深くはいった。老人は仰向けにひっくりかえり、敷石のうえで後頭部が鈍いやな音をたてた。みるまに血が噴いてきた。息を整えた佳蔵が刀を振りかぶったとき、突然、老人は跳ねおき、さっきまでの眩くような低声と打って変わった甲高い声で、「お出会いを。お出会いを。曲者じゃっ」と絶叫しながら、門まで十間の距離をこけつまろびつ走ってゆく。

彼を探し求める次郎彦の声は耳朶にあつたが、答えるひまはなかった。彼は追い、斬った、が、どれも浅傷。老人は血塗れになりながらも喚いて門を出、横本丁の道を東へ東へと這って逃げる。ふりかえって白刃をみるたび悲鳴を高くする老人の姿に、佳蔵は「侍なら向かってこい」と心で罵りながら、無事の殺人を犯すような不快さを押しこらして刀を振りまわした。

道の向かいの福間式部邸では早くも提灯が出た。行く手の松岡邸でも騒ぎをききつけて数人が門前に出、こちらをすかしみて、「そこで抜刀しているのは誰かっ」と咎めた。佳蔵は、はっと立ちどまった。戦場以外でみだりに腰の物を抜いてはなら

ぬ、面体、体どこにでも刀創あればお咎めとおもえ、とは、幼いときからくりかえし叩きこまれた侍の掟である。金縛りになった佳蔵の目の前を、老人は一步づつ一步づつ這って遠去かってゆく。もはやこれまで、と佳蔵は身をひるがえして横本丁の道を西に逃れた。松岡家の者はそれをみると、倒れている老人にあえて手出しせず門を閉ざした。哀訴をくりかえしていた老人はまた這った。ついに横本丁角の馬廻組頭・森主水邸まで這った老人は、ようやくそこで森家の家人に助けられた。だが、傷を療めた森主水は、それが背面ばかりの傷と知ると、「御家老、気をたしかにもたれい」と冷やかな声でいった。

佳蔵をさがし求めて北から走ってきた次郎彦は、浅見邸近くでようやく、それらしい姿をみた。

「斬ったか」

走りよって問うと、佳蔵の顔は歪んだ。

「すまぬ、仕損じ」

袴の間に隠してきた刀は、血糊でべっとり濡れていた。鞘も履物も、富山邸に忘れたままである。次郎彦は手拭で刀身を巻くと、呆然自失している佳蔵に「行けっ」と、どなった。ふらふらとあるきだした佳蔵は、少しゆくとし、ゃんとなって、千吉の舟が待っている遠石の浜めざして駆けだした。岩国ではいま吉川侯に調停を依頼するため、宗藩の麻田公輔が滞在している。それをたよって岩国領へ脱藩する手筈であった。

次郎彦はしばらく佇っていた。

単身、本多用人を斬りにゆく、と決心してから、桜馬場で連絡を待っているはずの唯一をおもいだした。ともかく唯一に知らせなければ、と走ってゆくと、意外にもそこには、唯一だけでなく兄の安之丞も、吉弘新九郎、光井左馬之丞、庄原登美衛、信田作太夫たちの同志が集まっていた。彼らは唯一のしらせにおどろきながらも、佳蔵が富山を斬れば、大挙して本多用人を襲おうと、とっさの間に決めたのであった。

次郎彦は、佳蔵の失敗を告げて、いった。

「今夜は延期じゃ。佳蔵はすでに脱藩したゆえ、今夜のことは佳蔵の一存とし、われわれは次の機会を狙おうではないか」



ふしぎなことに、今すぐ本多へのりこもうという提案は、このとき誰の口からも出なかった。むしろ、いよいよとなれば白昼、用人の登邸の折にでも実行できるという自重説のほうが勝っていた。

それに、江戸邸用人となって江戸におもむいた林芳雲のあとに用人となった本多眞は、もともと富山家老の代弁者にすぎない。

桜の幹に背をあずけ、延期を説く弟の様子をじっとみていた安之丞は、腰の差料をぬいて次郎彦にわたし、「佳蔵はたしかに岩国へ脱藩したのだな。では、鞘なしでは歩けまい。お前はこれを持って追ってゆき、なんとしてでも逃げのびよ、とつたえてやれ。庄原と吉弘も同道してやってくれぬか」と二人に目配せした。見抜かれたと知った次郎彦は、狂ったように叫びだした。

「たのむ、本多へゆかせろ。佳蔵一人に責めを負わすことはできん」

「本多も今ごろはしらせをうけて警戒しているだろう、死に行つてなんとする」

「どうせ徳山は俗論一色。ここにいても死んだとおなじ。本多を斬つて、おれも脱藩する」

無計画な暴発はよせ、と、安之丞はおもいきり殴りつけた。次郎彦は土に坐りこんで泣いた。

「機がすぎてしまふ、こうしている間に」

彼はうわごとのようにくりかえした。

そして実際に機はすぎていった。計画は、次郎彦がほんの数秒早く下男と顔を合わせたときから、齟齬をきたしていたのだ。た。

翌日。

富山家老刺さる、との報せに、家中のおどろきは一通りではない。

上御用所では、「昨夜、二奸を誅し脱走いたし候」としるされた佳蔵の書置をめぐり、冒頭から両派の空気は殺気だった。た。

俗論派が、

「藩内秩序をみだす不忠不義の徒。みだりに家老を刺傷し、休職中の両人役、整修陣元締役等閑のことに加えて、脱藩の罪。即刻、追手をかけるべし」

と主張すれば、これまで沈黙していた江村彦之進が、

「不忠不義とは何をもっていうか。佳蔵今回の拳はひとえに誠忠の念やみがたきによるもの、この大變のときにおいて幕府に阿諛し、大殿をおしこめ、三太夫を斬り、長州の封土を削ってまで恭順を主張する者こそ、不忠の極まれるものである」と反論した。

こうして公の場で詮議されれば、佳蔵も処罰されるが、相手も無傷ではありえず、かならずなんらかの沙汰がおりる。

はたして、桜井家老が、

「二奸とは、一は富山家老であろうが、他は誰か」

といったとき、一同の視線はいっせいに本多用人に集まった。

そしてなぜ「奸」であるか、「二奸」の詮議に移ったとき、その席へ、富山家老を手当てした外科医・池田順京の報告書が提出されてきた。

主たる傷は、右肩先から背中へかけ、長さ七寸、深さ一寸。そのほかに背中に浅傷七カ所、踵に一カ所……聞くにつれ、一座の者の表情は微妙に変化していったが、ついに、踵一ヶ所のくだりにきて失笑した。それらの傷がどんな状況の下に生じたかは、誰の目にもあきらからかであった。

「不覚の至りである」

桜井家老は苦りきって吐きすてるように評した。

佳蔵は富山家老を殺せなかったが、背中に負わせた傷が彼の政治的生命を断った。その日のうちに職をとかれた彼の名は、以後、一切、人の口にのぼることはなかった。

使僧たちは、木槿むくげの花の咲き乱れる大成寺で待っていた。八日夜に富山家老から密書がとどいたあとは、またしても忘れたもののように、なんの音沙汰もない。和睦のための協議で長びいているとのみ信じていた使僧たちは、真相は逆に富山家老を斬って氣勢をあげていると知って、激怒した。

「内紛を口実に、かよう使者を冷遇するのは主戦の通告にひとしい。かくのごとき過激野蠻なる藩に勧告は無用じゃ。もはや、助命はおぼつかないと覚悟せられよ」

と、桜井家老にひきあげを宣言した。

家老もひきとめなかつた。岩国まで藩士二名を護衛のためつけると申しでると、

「朝敵とは同行せず」

と冷笑し、さらに、

「貴藩すでに死に体たひ。幕府の條件を逐一うけるほか延命の手だてはあるまい。憐れむべし」

と、またしても無礼をきわめた捨科白であつた。

二僧の立立は十一日夕刻。

供先の提灯のあかりが東川あづしに沿って木陰にみえかくれしながら遠去かつてゆく。和睦の望みがしだいに遠去かるのを見送つた俗論派の壮士たちは、なお諦めきれず、続々と、本多眞に代つてあらたに用人となつた飯田厚蔵の邸にあつまつた。

まだ遅くはない、三太夫の首より先に、徳山は徳山としての誠意を示せば、和睦に応じるかもしれぬ、それには、

「五首もさしだせば、どうじゃ」

という者があつた。

飯田厚蔵は、のち明治になり、遠島中の身ながら宗藩の前原一誠と組んで、ふたたび蜂起したほど攻撃的な人物であつた。まして、富山家老とは義理ながら甥にあたる間柄である。鼻のわきに大きなほくろをもつ彼は、すぐ元藩に謁し、まず本城清と江村彦之進の職を剥ぎ、ついで征長軍に備えて内の乱れをのぞくため、攘夷派のすべてを一掃するように進言した。

元藩はそれをゆるし、すべての処置を彼に一任した。

ただちに、本城清と江村彦之進は、禁足待命となる。俗論派のほうは、機先を制すに、いささかもためらわなかった。

#### 四

九日の夜、となりの富山邸で時ならぬ叫びがあったのを聞くと、ひさは床の上に起き直った、騒ぎはやまず、門のあたりでしきりに哀訴する声もきこえる。松蔵を見にやると、何者かがご家老に斬りかかったという信じられないような報告である。「その曲者は、なんでも河田様とか……」、声をひそめた松蔵の言葉に、ひさの背筋を冷たいものがはしった。健をよんでたずねると、はたして、次郎彦も不在で、机上はすっかり整理されているという。

「だが今朝は三人集まって、子供のころの思い出話をして愉快そうに笑うとったが」  
健のことばに、ひさはぎくりとした。

涙をためた大きな眼で自分をみつめていた次郎彦の態度といい、もはや疑う余地はなかった。

しばらく眼を閉じていたひさは、やがて身支度をし、産褥を片付けると、のぶに大急ぎで髪を結うようにたのんだ。「今、すぐに」と聞き返したのぶは、姉の気配に押されて黙って髪を梳きはじめた。元結をかたくし、眼尻がつりあがるほどきつく結うにつれ、鏡の中のひさの顔から産後のけだるさが消え、いつもの凜とした表情に変わっていった。

翌日、次郎彦は何事もなかったように浅見家へ出かけていったが、ひさは昨夜おそく泥塗れになって帰宅した彼をみていたし、またその眼でみれば、彼がここ十日来はじめて平靜でいることといい、外出の都度行く先を告げてゆくことといい、もはや彼がすっかり覚悟を決めているように、ひさにはみえた。

使僧が去った十一日の夕方になって、家中の一角で奇妙な騒ぎがおこり、それはあつというまに膨れあがって、家中全体を

恐怖におとしられた。事の起こりは、足軽たちの家のある勢屯町せいでん一帯で誰の仕業か井戸の釣瓶縄が切られ、水が使えなくなっているのが発見されたことであつた。「おまえのところもか」「そういえば夜ごと、お館の裏山に薪を運んでいる怪しい人影をみたぞ」「悪人どもがお館に放火し、家中丸ごと焼き打ちを企てているにちがいない」と口づたえに流言がとびかい、ついに非常警戒の番士の巡邏もはじまつた。「挙動不審の者はただちに捕えて訴えよ」とふれてきた番士は、じろりと松蔵をみて、「お館の裏山に薪を運んでいた曲者は、それは大きな男じゃつたというぞ」といった、という。あながちひさの気のせいばかりでなく、六尺棒をもつた一隊は、この区劃をたえまなく巡邏して砂をふむ足音をひびかせた。

深夜、それが間遠になつた際に、忍んできた者があつた。次郎彦は扉際に蹲まつてひそひそ話しこんでいたが、やがて別れて座敷にかえると、ひさを呼んだ。二人は灯をつけぬ座敷の闇で向きあつてすわつた。

「いま、唯一が、本城どのの江村どのの上使が立ち、禁足閉門となつたのを告げにきた。あすは、富山家老と本多人襲撃の謀議をしたわれら全員に、上使がくるであろう」

やはり……と、ひさは無言でうなずいた。

「無念なのは襲撃の失敗ではない。私のためにやったことではないが、罪は罪、わたしは潔く罪に服し、すすんで取調べをうけて俗論派の罪をこそ暴きたい。それゆえ脱藩もせず、この二日というもの、一日千秋のおもいで待っていたのだが……」

次郎彦の声はそこで乱れた。

昨年の堺町御門の変以来、俗論派の勢力が盛りかえすにつれ、彦之進は次郎彦たち同志をすべて役職から外し、自分と兄・清の二人で俗論の渦中にとどまつて戦うゆえ、諸君は雌伏して伏勢の好転をまて、と説きつづけてきたが、その自重説は次郎彦たち若者の考えとはあまりに径庭があつた。なればこそ、いま自分たちが起たねばとの使命感からの襲撃であつた。そしてこの二日間ひたすら待つた、徳山での決起に呼応する動きが、宗藩の同志か奇兵隊に発するのではないか、と。

だが、それは遠い辺地の支藩の内紛のみられたのか、宗藩の同志はうごかず、徳山のすぐ西の富田とんだにいる奇兵隊の支隊さえ静観したまま動かない。唯一が強烈な汗の臭いをさせながら、「敵之丞、もはやこれまで」と告げたとき、次郎彦はついに諦

めねばならぬことを知ったのだった。

「事すべて志と違つた。時流には逆らえぬ。ひさ、それが無念じゃ」

両手を重ねてきくひさの膝を、しきりにこまかな震えが走っていた。心の底に「お咎め」への用意はあり、いつ彼が明かしてくれるかとの二日間、いまの言葉を待っていたひさであったが、聞くうちに、明朝、禁足閉門の沙汰をうければそれに続くのは切腹ではないか、と直感したのである。

残された手段はもうないのだろうか、とひさは濃い闇を見廻し、その闇に溶けている次郎彦の大きな影を探るようにつめだが、腕組みした次郎彦の姿は、輪郭さえおぼろげであった。それに、上使の立つ明朝はすぐそこに迫っている。ひさは低声でたずねた。

「旦那様のお役に立ちとうございます。なにか、わたくしに出来ますことは」

首を振って、おばあさまにも誰にもいうでない、無用の心配をさせるな、といった次郎彦は、かつての若い日のように「おひさどの」と呼んだ。

「おひさどの、これから先、難儀なことじゃのう……ゆるせ」

彼には「行く末」がみえており、そのために言わずにおれなかつた言葉であった。

暗にその優しさを感じとつたひさは、

「旦那様に、もはやなにも、してさしあげられませぬ」

涙をこぼしながら、せめて残された日々をこの人のために、とひさは、優しさに報いることだけをねがった。

ひそかにそこらを取り片付けているうち、暁三時すぎ、門を叩く者があつた。それは、浅見の末弟の端で、ほどなく浅見家の上使が立つにつき、立会人として親族の一人である次郎彦を呼びにきたものであつた。松蔵に髪を直させ、衣服をあらためた次郎彦は、やがて式台におりた。みあげると、星もない漆黒の空は斑ら雲がぶあつく覆い、それが西風におされて無気味に移動していて、黎明の気配はどこにもなかつた。

「今朝は別して暗い……」

次郎彦はそうつぶやいた。

上使、長浜主税がくるとの前触れに蔵本の使丁がきたのは、次郎彦が出かけたすぐあとである。ひさは立会人に遠藤春台と考へ、健を走らせたが、まもなく戻った健は、遠藤家ではいくら呼んでも門をあけぬ、という。気が進まなかったが、塩川順藏を頼るほかなかった。塩川老人は近年富山派にまわり、役職にもありつき、ために兎玉とは疎遠の間柄になっているが、今はそんなことにこだわっている時がない。

異変は、老人の到着した直後におきた。

数人の壮士が格子門を蹴破る勢いで乱入してきたとおもうと、口々に、「兎玉次郎彦、上意である。これへ出ろ」と喚いた。いづれも顔がひきつっている。

太刀をひきつけた健を目で制し、塩川老人は玄關に出て懸命に訴えた。「次郎彦は不在である」「どこへいった」「それは知らぬ」

「お館か。では、要所に散れっ」、彼らは血相変えた顔を見合すと、また走り去った。

健は袴の股立ちをとりながら、

「姉さま、これは只事ではない。わしは浅見へ走って、兄上に油断するなとつたえてくる。姉さまは一刻も早う、みなを納屋へかくせ。松蔵、格子戸は決してあけるでないぞ」

指図すると、駆けだしていった。

ひさは不安げな家族をすぐさま納屋にかくした。

陽の出ないままの朝がしだいに物の象かたちを浮かびあがらせてきた。刻みつけるように、一瞬、一瞬、が過ぎてゆく。老人は式台で足踏みしつつ、「長浜どのはまだか。長浜どのは遅いのう」と焦れた。いまは上使の到着だけが待たれる。そして、奥へ入ろうとした時、声にならぬ気配が門前でおきた。走ってきた次郎彦がとびこむと同時に松蔵が戸を押えにかかったが、「開

ける、開ける」の連呼で、格子戸は松蔵もろとも番士の六尺棒の一撃で突き倒された。

なだれこんだ壮士たちは砂を蹴散らし一散に走ってきた。その刀身の前に身を屠るように、ひさはびたりと玄關に正座した。

「なに御用でございますか。いずれのお方も抜刀のまま、無礼でありましょう」

蒼白なひさの気魄に、先頭の熊谷志津美はおもわずたじろいだ。だが、続く谷速水はすでに狂気の世界にあり、目は虚ろで耳は鳴っていた。「邪魔立てするかっ」、ひさの小さな肩をつきとばすと、土足のまま玄關に躍りあがった。

## 五

刺客たちも逆上していた。

前夜から飯田用人邸に待機していた総勢三十四名の者たちは、征長軍に五首もさしだす手筈と信じ、白々あけに本城邸を襲ったが、本城邸にはすでに前夜のうちに上使が立ち、めざす清は閉門禁足を楯に姿をみせぬばかりか、「おぬしらに上意をつたえる資格はないはずだ」と、厳しく撥ねつけられた。そこではじめて、飯田用人とはべつの筋から上使が出ているのを知った彼らは、上使の立つ前になんとしてでも首をあげねば、まず首を、と狂乱しながら、本城邸からもっとも近い児玉邸へ殺到してきたのであった。

「ひさ、奥へ遁れろ」、抜きあわせながら次郎彦は叫んだ。

「児玉次郎彦、上意じゃ」

「いま上使がくる、上意を偽るな。用あらば礼を尽して出直せ、無礼者が」

「問答無用。それ、かかれ」

熊谷志津美と谷速水はたたみこんで斬りかけ、斬りかけ、ついに志津美は狭い室内では不利と刀を捨てて組みついた。次郎



彦と彼は組んだまま、二転、三転して庭へおちた。そこを数人折り重なってとびつき、次郎彦はついに組みしかれて縄を打たれた。

「なにをするっ」

縛められた次郎彦は怒りに荒れくるって、ずるずると数人を引ずったが、もう抵抗できなかつた。「連行する。歩け」と、一行は次郎彦を中にして門まで歩いた。

声もなく見送っていたひさは、そこで、縄尻をとっていた谷速水の手が、どんと力一杯次郎彦の背を突くのを見た。よろめき、門框に足を絡ませた次郎彦は、前のめりに踏み渡しの石にうつぶせ、起きあがるうともがいて上体を反らせた。首をさしのべた形になったのを見澄まし、堀外に待っていた壮士の一人が、これは田中龜三郎という者であったが、思いきって刀を振りおろした。首が落ち、白い背骨が出た。それへさらに後手に縛られた背中めがけて三太刀も浴せ、「次は江村だ」「浅見へむかえ」、てんでに声をかけあい、疾風のように走り去った。ゆきちがいにになった健もまだもどらぬ、ほんの短かい間の殺戮であつた。

おなじころ、べつの水津余みづつゆ一らの一行は、大成寺に近い江村邸の門前で、「ご舎弟君をだせ。馬廻組頭・森どのの邸に連行する」と純一郎に迫っていた。

「弟はすでに上意をうけたゆえ、諸君にわたすわけにはゆかぬ」と、純一郎は必死に応待したが、柄つかを叩いて怒号する声はしだいに大きくなる。玄関わきの三畳の小室が部屋住みの彦之進の居室であつたが、障子一枚隔ててそのやりとりを聞く彦之進には、彼らの殺気がひしひしと感じられ、このままでは兄上が斬られる、と覚えず立ちあがった。純一郎に本城清、彦之進のこの三兄弟の仲のよさは無類のもので、ことに病弱の長兄に対する彦之進の愛情は、食に問い、衣に問うほどの細やかさであつた。

「出るな、彦之進。これは畏だぞ」

蒼白の純一郎は大手をひろげて制めたが、彦之進はすすんで擒つかになつた。

縄打った彦之進を中に、一行は北へ上り、本丁を横切って森邸の門前へ出たが、そこからまた南へ下る。

「家中を曝し者にして歩く気か。早く森どのへ引きかえせ」

彦之進の叫びにも、誰も無気味にだまりこくっている。大成寺を目前にした大成寺関門の野道にさしかかったとき、彼らは目配せして、左右へとびのいた。かかれっ、命じられた番士が彦之進の髪に六尺棒をふるった。脳漿が散った。よろめくところを、右脇腹を刺し、右手、右肩先と刃を入れた。髻を切った彦之進は、薬人形を倒すように大成寺にむかった姿勢で地に倒れた。この場所をえらんだのは、もとより彼らの悪意にはかならない。関門の詰所から錠をひきずってきた彼らは骸のうえに放ると、みだれ咲く曼珠沙華の花をふみしだいて浅見へと走った。

すでに次郎彦殺さるとのしらせをうけた浅見家では、栄三郎、修次ともに武器をとり、安之丞をかばって斬死の覚悟である。ここでは刺客たちも暴発できず、「渡せ」「渡せぬ」と押し問答しているうち、長浜主税が馬を煽って鎮静にかけつけてきた。安之丞は森邸に連行されることになったが、縄は打たず、形式的に帯にはさんだまま、その縄尻は栄三郎自身でしっかりと持ち、わきを修次がかためる油断のなさで、森邸に入った。

ほどなく縄打たれた井上唯一も入った。

そのころには、曇っていた空が一転して眩しいほどの晴天となった。切迫した高調子で緊急総登城の太鼓が鳴りはじめた。

その音に、ひさをはじめ兎玉の家族は呪縛から解かれたように現実にはきもどされたが、我にかえると同時に、齒の根もあわないほどの恐怖が襲ってきた。だれも口を利かず、まして泣きもしない。ただ呆然と、前庭の植込みやその枝に小鳥が囁いているいつもの朝の風景をみつめ、こちらむきの骸の跡が痙攣をくりかえすのを見て、慌てて目をそらした。風向きが変わると、腥臭が漂ってきた。太鼓は鳴りやまない。もとが突然立ちあがった。彼女を衝き動かししたのは、烈しい怒りであった。

「こんな非道が許されてよいはずはない。縄打ってから滅多切りとは、欺し討ちではありませぬか。これが上意か。おいで、健、母と一緒に組頭・森主水どのに問いただすのじゃ」

もともと健が行ってしまうと、ひさも気を取り直した。

せめて骸を覆うように、と松蔵に白布をわたしたが、門外に立つ二人の番士は、「ご検屍あるまで、手をふれることまかりならぬ」と、六尺棒をつきだした。「人の情もないのか、おぬしらは」、松蔵は棒を払いのけ、骸を覆った。踏みわたしの下を流れる溝の水は真紅に染まって、いつ薄れるともなかった。無数の蠅が蜻集してきた。松蔵は嘔き気をおさえながら、忠実な番犬のように骸の傍をうごかなかった。

太鼓はいつか止み、静寂がもどっていた。陽は暑さを伴って高くなった。初秋特有の黄蘗キナ色の光りにみちた静寂には、生欠伸を催すようなげだるさもある。それまで、ひしとひさに寄り添っていたのぶは、しきりに手を動かし、うるさく纏いつく虻を払うような無意識の仕種をしていた。ひさ自身もさきほどからずっと周囲に、なにか苛立たせるもののあるのに気付いて見廻すと、塩川老人がうつつ心を失ったさまで立ったり坐ったりしながら、絶え間なくぶつぶつと呟きつづけているのであった、「怖ろしいことよのう。憎まれていたからじゃ、怖ろしいことよのう」。

しばらく感情を抑えて聞いていたひさは、老人を揺りおこすように呼びかけた。

「おじさま。おじさまには今すぐ、ご検死の届出に行っていただきましよう」

……と、老人は、ゴケンシ、ゴケンシとおうむ返しにひさの言葉をなぞったのち、ようやく理解したのか恐怖に駆られてひさの無表情な顔をまじまじとみつめ、こけつ転びつ、骸のわきをすりぬけて表へとびだしていった。老人の姿が視界から消えると、張りつめていたひさの意識がとぎれた。しきりに乳を求める文太郎の泣き声がひさを呼びもどし、ひさは習慣的に懐をひろげたが、一滴の乳も出なくなっていた。

骸は丸一日放置され、御検屍の終わったのは夜も深くなってからである。

この日、家中は震撼していた。

上意によって禁足閉門になった者が、べつの上意によって討ちはたされ、また捕縛連行されるなど、あり得べからざる事態であり、藩法はないに等しい。残り二十五名の攘夷派の者は刺客にそなえて武器をとり、俗論派も報復をおそれて武装し、一方で暴発鎮静にかけまわる者、館を守る者と、だれもが声を嗶らして走った。館の大門も城下六カ所の閉門もすべて閉ざされ、

「挙動不審の者はただちに射殺せよ」との命をうけた兵たちによって固められた。

その戦時さながらの空気のなかで、蔵本では飯田用人の主張が通り、本城清、浅見安之丞、井上唯一、信田作太夫の処刑がきまつて殿のゆるしを乞うばかりになったとき、富田の奇兵隊が同志奪回に動きはじめた、との急報が入った。評定はながれ、にわかには大砲まで曳きだして西の関門を固める騒ぎ、人心恟々として、この長い八月十二日は深夜になっても暮れようとしなかつた。

## 六

本城清、浅見安之丞、井上唯一、信田作太夫（この人は、筑前柳川藩から馬術指南にきていた同志である）ほか数名は、ほどなく、海辺近くにある浜崎本牢はまざきほんらう入りとなった。

十九日、おもいもかけず脱走した河田佳蔵が檻送されてきて、唯一と合牢となった。吉川侯は、窮鳥は懐に入れず、そのまま佳蔵を徳山藩にひきわたしたのであった。

彦之進、次郎彦ともに、もはや彼の手のとどかぬ世界に一足先に去ったのを知った佳蔵は、二日というもの二重格子の奥で泣きつづけ、そして吟じた。

夙有男児志気張し　逢人満口唱勤王し

公論纒定一藩是　陰險何凶二耦妨くさ

明決あき奔家忘妻と　誠忠許国共存亡し

同心謀事君先斃　断尽孤囚鉄石賜

すると、中庭をかこんでこの字形に並ぶ各牢から唱和の声がおこり、牢番が詰所から走りできて制したが、吟声はやまな

かった。この不遇の一年間に次郎彦は多くの慷慨の詩を残したが、それら堂々たる述懐の詩よりも「春日題山寺」という稚拙な小さい詩をだれかが口によせたとき、おもわず唱和の声は嗚咽にとぎれた。

牀頭読罷大玄經 独立黄昏月滿庭

花暗柳眠人不見 啼鵲一叫暮山青

その詩のなかでは、「一結甚佳」との本城清の評を得た十七才の次郎彦が、得意気にも羞かむようにも尻切れとんぼの眉をあげて笑っていた。そしてまた、袖が肘までしかない腕をのばして詩箋をとりあげる若さに匂うような次郎彦が、皆の目のなかでいきいきと動いていた。

獄舎のくらしは米四合と塩のみ、下帯もない素肌すみに囚衣一枚まとして、高さ五尺にもみたぬ二重格子の奥に端座してすごす。それでも皆は、各牢より口で授け耳で受け、吟声たがいに送って詩を賦し、獄中に萎えてゆく氣力を奮いたたせるのであった。

佳蔵と唯一の処刑は、十月二十四日晝。

皆が食いいるように見守るなか、佳蔵の声は激してはじめ噎れた。

疎狂憂国欲排氣 一片赤心聊報君

劍響忽醒廿余夢 他年誰弁正邪分

その後半生、長槍をさげてどこまでも久坂玄端と行を共にした唯一の声は、よく透る美しい声であった。

潜身報国帝京間 辛脱重囹圄歸故山

此日終然逢斬戮 勤王未變赤心殷

その夜、処刑場の砂にしぶきをあげて寒雨が降りしきった。

吹雪がつむじを巻いて中庭に舞うようになった正月、急に浜崎街道は騒然として、本牢近くの民家に屯していた応援の岩国藩兵六十名が出陣する氣配である。

「奇兵隊が同志奪回にきた節は、防ぐにはおよばぬ。この槍で受牢者を突きころせ」

と、牢番小頭の声もきこえた。

今度こそ、奇兵隊がたちあがったのだ、と清は感じた。八月の騒動におくれること四ヵ月、あまりにおそかった決起であったが、ついに状勢は動きはじめた。「宗藩に事のおきるとき、それはかならず徳山に発する」、のであった。

徳山の弾圧に力をえた宗藩の俗論派は、夏から三ヵ月の間どしどし攘夷派を投獄、処刑したが、ついにそれを怒った高杉晋作がたちあがり、俗論政府を倒すべく山口政事堂めざして破竹の進撃をしていたころである。獄中の清はそれは知らぬままに、明暗を分ける時が刻々と自分に近付いているのを感じた。

八日、牢番は清に酒を捧げて、君公より賜わった年酒だといった。これまで下僕のように侍いてくれた牢番の手がふるえているのを清は憐れみ深く見やっていた。

「わが藩では、獄中者に酒を賜う例はないのじゃ」

「それがその、今日は政事始めでありますとかで」

「政事始め、そうか、そうであったな」

清は毒酒の盃を押しただいてから、懐へ流しこんだ。

毒殺に失敗したのをきくと、飯田用人は舌打ちした。いつ富田の奇兵隊がなだれこんでくるかわからぬ今では、もはや手段は問うところではなかった。

数日のちの深夜、檻に近付いてきた牢番小頭は、提灯のあかりをさしつけるようにして、

「とくに死一等を減じて馬島遠島とする。本城清、出ませえ」

その声に、清は幽鬼のようになった顔をあげた。同志のなかでもっとも弱々しい、虫一つ殺せない、聖人のようなこの人は、最後の時になってこうした欺瞞に抵抗するのであった。これは無法だと、

「官命をつたうるにはかならず使者が立つはず。小頭どのにその権限はない」

「ええい、つべこべと。馬島にゆけば使者が待っておるわ。早々、出ませえ」

この夜、萎えた足で吹雪の浜辺に曳かれていったのは、清、安之丞、信田作太夫の三人で、飯田用人は罪名言いわたしもないまま、三人を犬のように縊り殺しては骸は砂に埋め、やっとその目的を達したのであった。

児玉家でもそのころ、家柄断絶、邸は即刻あけわたすようとの沙汰をうけていた。

八月十二日以降、時が絶えたように、門も雨戸も閉めて薄明のなかでひっそり息をしていた七人は、邸の内外を清め、かねてまとめてあった家財とともに氷雨の降るなかを近くの牧家へと立ち退いた。

そこは児玉からすぐ近く、本城清邸とはむきあいの邸で、三十五石には不似合な七百二十坪の余地を占めていた。納屋に落ちつき、町方の綿屋から機を借りて据えたときにはもう夜、佻しい新しい住居に暗い灯がまたたくなかで、松蔵は暇乞いを申しでた。

一人半の捨扶持(米六号)もなくなったこの境遇では、福田寺の寺男となって末ながく半九郎や次郎彦の菩提を弔いたいという彼の申出をうけるよりほかなかった。

「お前の気性をおもって、旦那様の着物を仕立直しておきました。渡さずにすむようにと願うてきましたのに。長く仕えてくれ、家族も同様におもうのに、もう何一つ、報いてあげられませぬ。松蔵。せめて、これを」

ひさがさしだと、受けとる松蔵の手も烈しく震えた。その頭は真白になっている。ひさが六つの時から児玉家に仕えた松蔵であった。ひさはその長い年月をおもい、その年になって身寄りもない彼の身をおもって胸がいたんだが、主従の別れは言葉少なであった。

翌日から、もとは紡いで、のぶとひさが織るくらし、晒を二反織れば一反分の綿が手元に残る。馴れば一日に一反は織ることができる。ようやく馴れてきたとよろこんだ頃、「鶏が卵をうまんようになった、機音がやかましいゆえ鶏でも眠れんのだ」と、胸にこたえるような妻女の一言であった。お咎めとは、見せしめであり、懲らしめであり、侍の誇りが磨り減るまで地べたに額をこすりつけられるものとは知っていたが、これ以上は、「ともかくも来られよ」と親類の者たちより先に温かい申し出をしてくれた主への感謝が醜く変りそうで、ひさは自分のはげしい気性をおそれた。

その日のうちに、祖母の実家である松岡家をたよって城下の西外れに移ったひさは、依固地なまでに松岡家のすすめをふりきって、人里はなれた段々畠の斜面にある農具小屋をえらんだ。

そこには、人の煩わしさはなかった。鶯の鳴き声だけがあつた。季節が廻ると、桃も李も噴きこぼれるように咲いた。山桜も咲いた。ひさは決してみなかったが、東の方には、背を向けてきた城下の、桜馬場とよばれるほど見事な馬場の桜が、白い花冠のように咲き揃う遠景もあつた。たずね、たずねしてやってきた松蔵に、ひさは「眺めのよいところでしよう」と笑顔を作ってみせた。

だが……花の季節がすぎると、野性の自然の荒々しさはひさの想像をはるかに超え、草ははびこり、樹々の緑の洪水は小屋を没し、雨は建物も人も腐るまでしぶいて、なおもやまない。梅雨寒のころ、祖母は急に容態がわるくなった。ひさが手を握ると、その温みに祖母はわずかに唇をふるわせ、

「ひさ……優しくに……」

と洩らし、あとは歯のない口の暗みに吸いこまれて、それが最後であつた。

蒲団をあげてみて、たった三日臥つたばかりなのに畳におそろしいほど青黴が生えているのをみたとき、ひさはおもわずここに両手をついて、「おばあさま、ごめんさい、こんな所へ連れてきて」と泣いた。次郎彦の横死とそれにつづく零落の境遇は、老いた祖母の心身をいためつくしていたのにひさは意地からこの地をえらんだ、どれほど祖母は心細く、どれほど城下がなつかしかったことか、一度も愚痴をいわずついて来てくれただけに、医師にもみせられなかった死が今となっては悔まれてならなかった。

祖母が朝夕誦した経の声がとだえ、喜怒哀楽を漉しとつたような笑顔がなくなると、家族はいっそう無口になった。のぶは、すりきれた袖口をみつめては、ひさに気取られぬように溜め息をついた。総髪にした健は、浪人と嘲けられるのが厭さに、夜に紛れて晒をとどけにゆくようになった。「口惜しければ兄さまの仇討ちをすることじゃ」と叱ると、

「近頃の姉さまは口を開けば怒ってばかりではないか。鬼のような顔じゃ。辛いのは、みんな辛いじゃ。こんな時に心を



「一つしてこそ家族ではないか」

思いつめたように口答えした。

ひさは、はっとした。

祖母の臨終のあの言葉は、「優しうに、してくれて」ではなく、「優しうに、おなり」といったのだったか。髪ふり乱し、瘦せて顎の尖った自分の顔はまさしく鬼、思いやりや和みや笑いなどの柔らかい心はとうに食に食われ、いまの彼女に残っているのは意地と誇りと冷たく燃える怒りばかり……。はじめて自分をみつめ直したひさは黙って機台にもどった。

腰が強張り、目がかすみ、腕が上らなくなっても、彼女は織った。ひたすら織った。織ることが生きること、今までは生きていなかった、彼女はそうおもいつつ織っては息もたえだえに眠り、目覚めてはまた梭を握った。小屋の板窓の向こうでは雨が飛沫をあげたり灼熱の暑気がゆらいだりしたが、彼女はなにもみず、糸を一筋づつ重ねながら、図柄のない生成りの晒ひらの白に濃く厚くそのときどきの想いを織りこんでいった。やがて、織ることはひさに平安をもたらしすようにもなった。戸口に立った蔵本の使丁が、「健という者がおるか。新知二十五石をあたえ、中小姓として召しだすとお沙汰じゃ」、横柄な口調で告げるときも彼女の手は無意識に動きつづけていた。

あらたに拝領するのは、御弓丁西から数えて四番邸。夜になって人目を忍んでやってきたひさは、樗の大樹の下の住居に灯が入り、見知らぬ老婆が坐っているさまをみて、足が竦んでしまった。たしか無人のはずなのに、と佇んでいると、その気配に、「お待ちしりました」と出てきた老婆は、ひさをみて人違いを恥じるようにした。そして二人は、同時に声をあげてお互いの顔を覗きこんでいた。老婆とおもったのは、浅見のはなであった。一年間の辛酸は、ひさを陽焦けした農婦のように妻れさせていたが、次郎彦と安之丞の二子を殺され長い閉門に耐えたはなをも、八十近い媪のように変えてしまっていた。二人はまじまじとみつめあい、お互いの辛苦をみながら、どちらからともなく手を取りあった。正義が貫かれたとの実感はなく、二人は互いの肩を抱いて、

「やっと、お咎めがゆりました。長い間でありました、ほんとうに長い間、ご苦労でありました……」

と、泣くばかりであった。

七

真暗な野道を百合若の手を曳きながら歩きつづけ、やっとその家に辿りつくくと、めざす家にはすでに他人が入っていて団欒しているのを、ひさは途方にくれて垣根越しにのぞいている……、今朝も、その夢をみた。

健康なひさは仄暗いうちに起きだし、身繕いをすまずと機台に上る。馴れた手付きで梭を握ると、手すさびなのにあっけな  
いほど早く、半反の晒を織りあげてしまった。朝餉の仕度に厨にたち、窓ごしにみると、外は薄緑色の春の朝になっている。  
となりの兼崎昌司の邸との境にある樗の大樹がいっせいに芽吹き、小指の先ほどもない嫩葉があたまを撞げてきたころ、障子  
も鏡の中の顔も蒼く染まるのも間近い。ほどなく桜馬場の桜も白い花冠のように咲くだろう。だが、ひさは春を迎えたよろこ  
びを誰と語りあうこともなく、小さな鍋にきつちり一人分の味噌汁をつくり、ひとりの膳に向かう。

かつて軽禄の士が住んでいたこのあたりは、ひさの頭のなかでは漠然と城下の東の外れでしかなかったのに、今はそこに住  
んでいることのふしぎさにも、有為転変という語がおもわれてならない。

あの気位の高かったもとでさえ、

「住む家のあるのは有難いことじゃ」

と感謝して、箆箱ほど細長いこの邸で息をひきとった。

のぶもここから、軍人である宗藩の波多野毅に嫁いでいった。

健（源太郎）もここから鳥羽伏見の戦に出陣していった。

樗の樹の根元に切腹した熊谷主税の亡霊がたつと怖がっていた文太郎も、となりの兼崎昌司の遺児百合蔵と仲よく浅見修次

の「山静塾」にまなんでいたが、広島に英語学校が創設されると、ともに家禄公債を金にかえ、その一半をもって広島に行つてしまつた。

御一新になって十年、ひさの傍にはもう誰もいない。

ひさは仏壇にごはんを供えて鉦を鳴らす。

一休院義獄了忠居士

次郎彦の戒名をそついう。

「もうちいっと辛抱しておられたら、よろしうありましたのに。お前様はせつかちで」

巨きな体に似合わず次郎彦には性急なところが、ひさを呼ぶにもいつも二度続けてよんだものであった。

御一新……それがどんな形か、次郎彦はその目でみたかたであるうに。あの元治という一年しかなかつた年、考えてみれば俗論派が跋扈したのは八月から十二月までのほんの短かい間であつたのに、進んだり退いたりする術を知らず、佳蔵や唯一とまっしぐらに駆けていったのも若さのせいであつた。

ひさは掃除にかかる。荒れていたこの邸もひさの手にかかると思違へるようになったが、ひさはそのうえにまだきれいに拭きこんでゆく。特に、なんのために、誰のために、と自問しないでもないが、ひさは手を遊ばせておくことを知らないのだつた。

「ご精が出ますのう」

郵便配達夫が声をかけて手紙をおいた。

東京麹町区富士見町、裏をかえすまでもなくいつも忙しげなその筆蹟は、鳥羽伏見の戦に参加した健改め源太郎のもので、姉おもいの彼はこうして軍務の暇をみつけては姉に上京を促してくるのであつた。源太郎もいつか亡くなつた次郎彦の年令をこえて二十六才、西南ノ役に副参謀として功があり今は陸軍少佐。翼を得て雲梯をかけるのぼるのに似た昇進で、人は赫々たる帝国陸軍の星などという。

ひさは真白な髪となった林芳雲とよく話しあったものだった。

「誰も彼もみんな東京へいってしまふ。ひさどのもゆかれるか」

「それが……迷うてしまいます」

「なして」

「もう嫁ももううて、源太郎は子もできました。私の出る幕はありません。私の役目はもう終わってしまいました」

「そんなことはない。人は生きてあるかぎり、その役はある。半九郎どのは命の盛りに亡くなられたが、わしは長しう生きた、それはわしなりの役があったからじゃ、とわしは解釈しておく」

蛤御門の変の直後から丸三年も江戸で檻囚され、氣力だけで生きのびて帰国した芳雲は、そのうち側用人として薩藩置県まで力をつくした。あの元治の騒動も、この人がいたら避けられたであろう、という者もいる。芳雲と江村純一郎とは、あたらしい徳山県の東西県令をつとめたが、それも長い期間ではなかった。

「江村どのは、この徳山に居るのが辛うてならぬ、と東京へゆかれるそうな」

「そうでありましょうなあ。私も横本丁へは足が向きませんもの。でも、源太郎のすすめにも、昔と違うて、お届けもお許しもいらざ好きな時に自由にどこへでもゆけるとおもいますと、嬉しいような、怖いような、これが御一新でありましようか」

「なんとゆうても、ひさどの。もう宗藩も支藩もなくなった。徳山にとっての新時代はこの一事に尽きるのじゃ」

しみじみと旧幕時代をふりかえって感慨深げであった芳雲も、逝いて一年となる。

福田寺へ墓参にと仕度しているところへ、綿屋がきた。女一人の住まいなので同室せず、次の間から平伏するのに、ひさは十反ばかり織りためていた晒をさしだした。

「いつもながら見事でありますのう。もうちいっと、目を粗うされてもよろしうありますのに」

「私にはそんなのしか織れませぬ」

「あのころから児玉さまの晒とゆうて、洗い崩れせんと評判でありましたけえのう」

綿屋はそういって、円とか銭とか、あたらしい単位の代価を置いていった。

ひさはあのころをおもいながら、草いきれにむせるような暖かな野道を、福田寺へと歩いていった。半九郎の墓のそばで、多くの逝いた者たちと言葉を交わす。最後に小さな野石にも花を置く。長州征伐の戦となって、松蔵は遠い昔に捨てた故郷にかえっていった。小倉城は三日三晩燃えつづけて長州軍の手におちたが、西の空を焦がすその焰のなかに松蔵もいたにちがいない、とひさはおもっている。

手をかざすと、白塀をめぐらしたかつてのお館と、それを懐に抱いたようにゆるく連なる中国山脈の山々、南に蒼く光るおだやかな春の海とがみえた。徳山。華やかでもなく美しくもない、それでいて素朴で明るい山河。ここに生まれ、育ち、そのときどき額を熱くして懸命に生きた。

ひさは、うっすら涙をうかべていつまでもその風景をながめていた。

帰りの峠道で農夫が挨拶した。

「お詣りでしたかのう。今日は、どなたの御命日でありますか」

「亡くなりました主人の……」

「それは結構でありますのうた（のう、あなた）、積もるお話もありましたらう」

周防訛りは鄙びて丁寧で、それに歌うような独特の抑揚をもっている。ひさは小腰をかかめて通りすぎてから、ふと気付いた。

この農夫も弟を長州征伐の折に失った。郵便配達夫の息子も鳥羽伏見の戦に死んだ。芳雲も息子を五稜郭の戦で亡くした。わたくしも浅見も江村どのも、もし黒の徽章をつけるとしたら徳山中、誰も彼も、その肅然とした群はながく続くであろう。

多くの血が流れ、御一新は成った。そして明治新政府には薩長閩の高官がひしめいているというのに、旧徳山藩出身者で廟堂に時めく者といって……その名を聞くことがない。

董色の晴れた空が、いつか翳っていた。

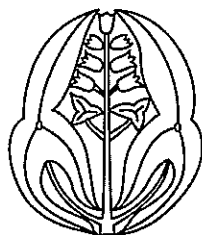
ひさはその後、児玉源太郎邸にあって、その十一人の子女の成人に力を添えた。源太郎はのち、内務大臣、台湾総督となり、日露戦争で総参謀長として智略のかぎりをつくして卒然と逝いたが、その間もひさの質素な日常はかわらなかつた。「節婦」として緑綬褒章を賜ったのは、昭和三年、八十六才の折。参内するひさの写真では、その表情は洒脱なまで明るく美しい笑顔である。ひさは老いて小さく軽くなってゆくにつれ、児玉の太刀自としての重味を増し、一族の敬愛のなかに長く生きた。元治の騒動については一度も語らず、その死は昭和十二年冬の一月十九日、九十五才であった。

完

参考図書

- |           |            |
|-----------|------------|
| 防長回天史     | 末松謙澄 編     |
| 徳山市史(上)   | 徳山市史編纂委員会刊 |
| 徳山市史資料(下) | 〃          |
| 郷土        | 下関市教育委員会刊  |
| 長州藩財政史談   | 兼重慎一談      |
| 浜崎集       | 浅見 澤著      |
| 来島又兵衛伝    | 三浦清堯著      |
| 橙堂遺稿      | 兼崎茂樹著      |
| 橙堂遺稿補遺    | 〃          |
| 我家我藩の歴史   | 〃          |

その他



徳山毛利家紋章 沢瀉(おもだか)

おもだか  
沢瀉の紋章の影に

【昭和六〇年 放送文学賞受賞】

日本放送作家協会

日本放送出版協会

受賞者 吉田紗美子

昭和六〇年三月受賞

## あとがき (秋原勝二)

創刊同人のこと 『作文』の誕生は昭和

七年(一九三二)一〇月。満洲事變の翌年であり中国領土内に満洲国が生まれたのと同じ年になる。他國の建國宣言に刺激されたものだが、祝ったり、支持同調の心は微塵もない。今からいえば二年前の話。生まれ故郷は租借地大連市。なつかしの大連。

創刊同人は七人。二〇歳代前半の満鉄社員五人、商業人二人。商業のうち城小碓<sup>じょうすゐ</sup>だけが最年長の二七歳、小杉茂樹と共に志は詩。満鉄社員五人は、詩が安達義信(大連病院事務局長)、落合郁郎(調査部関係)、島崎恭爾(鉄道車輛製造・補修の大連沙河河口工場)の三人、小説が青木実(大連図書館)、町原幸二(本社地方部)の二人。彼らは何よりも、純粹に文学を愛し、美しさ、きよらかさを求め競うあつまりだった。

『作文』を生涯守りとおしたのは青木実。青木が家族または本人の病氣などで不可能になるとすると、蔭で実務を支えたのが町原幸二。実務は、創刊後しばらくは青木が一人

ですべてを背負っていたが、途中から編集に限って同人有志が交替で担当するようになる。大連の各書店の店頭に置かしてもらおうと、次第に売れるようになった。毎日退社後、各書店をまわって売れ行きをしらべては報告するのは町原幸二。

対岸の他國であった昔の満洲国が、国有鉄道(元中国鉄道)をすべて関東軍をおして満鉄に、経営と建設を委託するようになる。満鉄社員の同人も満洲国内に転勤させられるようになった。やがて『作文』の売れ行きは二、三千部が完売に達し、同人費が要らなくなった。売上げだけで発行継続が可能になり同人雑誌の域を越えるばかりになった。

私を、文学の道に誘いこんだ同窓の上級生町原幸二の紹介で第二輯目から同人に加えてもらった私は創刊同人がみな二つも三つも年上なので、最年少である私は、同人会ではいつも小さくなっていた。

発行の許可は、日本政府の大連警察署で届け出には必ず発行人と編輯人を実名で書かねばならなかった。発行人青木実、編輯人安達義信の名義での門出だった。ところが、安

達が満洲国の首都新京(元長春、満鉄線最北の最終の街)に新設の満鉄事務局に勤務替えになったため同人を一旦退いたので、とつぜん私が実名で編輯人として届けられた。

太平洋南海の戦雲がきびしくなり、戦時統制で、大連警察署も第五四輯で『作文』の発行をストップさせたが、三年前に青木も奉天に、私は吉林に転勤、大連にいなかったのに、名義人は無届けのままだった。きびしい大連警察署がそれを大目に見てくれていた。

満洲時代の『作文』は、もう一冊、第五五輯が奉天で発行されている。表紙に「終刊号」と印刷されている。奉天の鉄道付属地は、そのときすでに満洲国になっていて、一回が限度で続刊はできなかった。昭和一七年だった。生きて帰れぬと思っていた創刊同人のうち、島崎恭爾を除く六人の連絡がつく。生活再建に苦しみ、心身すりへるなか、満洲で一旦終刊としてから、二二年の空白を経た昭和三九

(一九六四)年、青木実を中心に、第五六集の復刊を果たす。(満洲時代は輯を用い、復刊後は集となる)。

第二〇〇集の巻頭に私が復刊までの概要を、



書いている。これが最も詳しい経緯である。

二〇〇集には平成二二(二〇一〇)年五月に到達した。創刊同人は、安達、落合、島崎、町原、青木、城、小杉の順に世を去った。(P八八の物故同人表参照)。島崎恭爾だけは満洲時代早くに離れたが、あとの六人は生涯離れなかった。小杉茂樹が平成一七(二〇〇五)年に彼岸の人となると、創刊同人は一人もいなくなった。創刊時最年長の二七歳だった城小確は、租借地関東州の風土、先住民に心をそそいだ詩人だった。平成一三(二〇〇一)年に亡くなったが、思えば一〇〇歳に近い。

『作文』を支え続けた青木実が生を終えたのは平成九(一九九七)年。やむなく第一六六集から、八人目同人の私があとつぎとなり今日に至る。二〇〇集記念号では、青木実の遺族が資金で私を大きく助けた。

今回、不定期刊に移行するに当たり、創刊同人に思いを新たにし、以上を略記。

第二〇八集の執筆者 同人は渡辺利喜子と秋原。名古屋哲夫は病氣執筆不能となった。寄稿はいつもの坂井信夫、現役第一線の詩

人。両親は、作家・女優の故横田文子と詩人で満洲以来の作文同人故坂井勲司。毎集の寄稿で支援してくれた。阿部智行の「満洲の忘れもの」は、北朝鮮に近い、むかしから満洲のなかのなかに朝鮮族の多い延吉の街の、敗戦直後の在留日本人の戦き、苦難の様子を短く凝縮してふれている。特段に注目されるのは、中共軍の中に入り手伝った日本少年に対する中共兵の対応である。

二つの連載作品について 吉田紗美子と秋原の連載作が、今集をもって終了した。

秋原の「笛」は、作者が終生背負う重荷、「夜の話」の解説の書。

吉田には、昭和三四(一九五九)年に「素直」誌八号に収載し、第四二回芥川賞候補になった「感情のウェイヴ」という作品がある。今は私が読むことのできない作品だが、これも含めて吉田は多くのよい作品を書いているのに、生前一冊の単行本も残していない。今集完結をみた「沢瀉の紋章の影に」も同じ。遺族がそれを見つけて送ってくれたのを借しみ当誌に連載、記録したのだが、私の体力が

幸い持続、完結まで運べたのは、故同人吉田紗美子への、せめてもの贈り物となる、を喜ぶ。この作品の最後の方に若き日の児玉源太郎がチラリとでてくる。後年、西南の役で西郷隆盛の薩摩軍が熊本鎮台の熊本城を包囲攻撃したとき、守将谷干城の許、死守の指揮をとった児玉が、日露戦争では満洲派遣軍の総参謀長を務め日本に戦勝をもたらした軍略家であるのは多くの人の知るところ。児玉が満洲の日本政府代行機関としての満鉄の、初代総裁に後藤新平を推した満洲との深い因縁は、今につながる琴線。後藤新平の満鉄経営の心には、児玉源太郎の熱い血もつながっている。この連想は、私の全身をあたためる。

不定期刊に移行 定期刊を何とか続けた当誌は、次集から不定期に移る。定期発行には想像を越えるエネルギーが必要のため。『作文』は、今は私の心拍と共にある。

二〇一四年六月一日

物故同人表

(日付は歿日)

○印=創刊同人

木崎 竜(仲賢礼) 記念・98集 昭和18・1・16	上野 凌弘 記念・152集 平成4・8・16
野川 隆 記念・95集 昭和19・12・23 (仮出獄死)	○町原 幸二(島田幸二) 記念・153集 平成4・7・12
日向 伸夫(高橋貞雄) 記念・61集 昭和20・4・7 (沖繩戦死)(復刊6集)	大森 志郎 記念・155集 平成4・9・9
加納 三郎(平井孝雄) 記念・59集 昭和20・7・2 (復刊4集)	宗 英子(宗エイ) 記念・157集 平成5・10・14
吉野 治夫 記念・60集 昭和21・12・以降 (戦病死)(復刊6集)	(客員) 尾 彰 記念・159集 平成6・10・6
古川 賢一郎 記念・137集 昭和30・10・9	池淵 鈴江 記念・162集 平成7・11・12
坂井 艶司 記念・64集 昭和41・1・3 (復刊9集)	富田 寿(高橋敏夫) 記念・163集 平成8・2・7
○安達 義信 記念・80集 昭和44・12・19	江頭 正子 記念・—— 平成8・11・28
長尾 辰夫 記念・81集 昭和45・3・3	○青木 実 記念・166集 平成9・4・20
中山 美之 記念・90集 昭和47・9・9	大谷 健夫(大谷武男) 記念・172集 平成11・3・29
長谷川 濤 記念・96集 昭和48・12・16	○城 小稚(本家勇) 記念・179集 平成13・8・4
竹内 正一 記念・97集 昭和49・3・10	浅川 淑彦 記念・181集 平成14・4・21
船橋 破魔雄 記念・120集 昭和56・5・11	○小杉 茂樹(小杉福次) 記念・191集 平成17・5・8
三宅 豊子 記念・123集 昭和57・2・17	井上 郷(井上三郎) 記念・194集 平成18・11・21
滝口 武士 記念・123集 昭和57・5・15	吉田 紗美子 記念・200集 平成21・10・13
○落合 郁郎(落合利巨) 記念・124集 昭和57・10・26	佐々木 和子 記念・202集 平成22・2・26
八木橋 雄次郎 記念・130集 昭和59・8・14	松原 一枝(古田一枝) 記念・202集 平成23・1・31
麻生 鍊太郎 記念・130集 昭和59・9・10	
中川 俊夫(佐々木正) 記念・131集 昭和60・4・8	
高木 恭造 記念・139集 昭和62・10・23	
大野沢 緑郎 記念・142集 平成元・1・23	
古屋 重芳 記念・145集 平成2・1・31	
福家 富士夫 記念・148集 平成2・10・16	
○島崎 恭爾 記念・—— 平成3・4・17	
宮井 一郎 記念・150集 平成3・8・25	

計42名

(作文同人)

名古屋 哲夫

〒六〇三―八二五  
京都市北区紫野下門前町五

渡辺 利喜子

〒一九〇―〇〇三  
立川市栄町一―三五―九

秋原 勝二

〒二四九―〇〇二  
逗子市山の根三―十一―二五 渡辺方

次集  
第二〇九集

二〇九集から不定期刊に移行

作文第208集(頒価一、〇〇〇円)

発行日 二〇一四年七月一日

編集 秋原勝二  
発行人

発行所(〒二四九―〇〇二)

逗子市山の根三―十一―二五 渡辺方

作文社

電話 〇四六―八七一―五七三二

振替口座

〇〇一九〇―九一六八九二五

印刷所(〒七〇三―八三三)

岡山市中区高屋二一六―七

株式会社三門印刷所

電話 〇八六―二七三―〇五五〇代

# 秋原勝二

# 夜の話

—百歳の作家、

満洲日本語文学を書きついで—

七歳で渡った満洲と、日本本土の間でゆれうごく、  
望郷の念と、土地への愛着。

戦後引き揚げてからの日本での暮らし。

抱え続けた「満洲」と、自分にとっての「故郷」。

八〇年紡ぎ続けた作品集。

## 秋原勝二

## 小説、主要9作品とその人生

四六判・上製、320ページ、定価二七三〇円(本体二六〇〇円+税)  
発行・発売 編集グループSURE



### ご注文方法(本書は直接販売のみです)

郵便局備付けの郵便払込用紙に、ご住所、お名前、電話番号、書名(『夜の話』)、冊数をご記入の上、(00910-1-93863 編集グループSURE)あてに、

一冊につき 2940 円(定価 2730 円+送料 210 円)をお払込みください。

わたくしどもより責任をもって、郵送にてお届けいたします。

※送料は一回のご注文につき、何点でも 210 円です。(日本国内、同一の宛先に)

お問い合わせは 編集グループSURE

〒606-8301 京都市左京区吉田泉殿町 47 電話・ファクス 075-761-2391

Eメール [info@groupsure.net](mailto:info@groupsure.net) ホームページ <http://www.groupsure.net>